原著

≪素問≫ 陰陽応象大論における五行説に関する一考察

別府正志[a]　林克[b]　松岡尚則[c]

a 東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター，東京，〒113-8510 文京区湯島 1-5-45
b 大東文化大学文学部中国学科，東京，〒175-8571　東京都板橋区高島平 1-9-1
c 東邦大学総合診療・急病講座，東京，〒143-8540　東京都大田区大森西 6-11-1

A consideration of Wuxing theory in Suwen Yinyangyingxiangdalun

Masashi BEPPU[a]　Katsu HAYASHI[b]　Takanori MATSUOKA[c]

a Center for education research in medicine and dentistry, Tokyo Medical and Dental University, 1-5-45 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8510, Japan

b Department of Literature, Daito Bunka University, 1-9-1 Takashimadaira, Itabashi-ku, Tokyo 175-8571, Japan

c Department of General Medicine and Emergency Care, Faculty of Medicine, Toho university, 6-11-1, Omorinishi, Oota-ku, Tokyo, 143-8540, Japan

Abstract

The detail description based on Wuxing theory is admitted in Suwen – Yinyangyingxiangdalun no.5. However, some mistakes of sentences or characters are admitted. In Edo era, detailed investigation was performed by researchers. We made further study and got some findings. ① 23 characters were pointed out in TREE category. ② In FIRE category and WATER category, there were some mismatches in details. We found that these were caused by difference in described age. ③ Strange description such as “muscle bear heart” was also thought strange in Edo era. ④ In Edo era, the character You in “In shake, You” was pointed out not mean “Melancholy” but mean “Going up of Qi”. ⑤ There was no description related to the production of Wuxing though there were many description related to the conflict of Wuxing. ⑥ It joined issue by the annotation for the description of “Sad wins Anger” In TREE category. ⑦ The description of “Fire (Bitter) damaged Qi” in FIRE category and “Cold(Salty) damaged Blood” in WATER category were thought as error in writing. But we found that these might be caused by difference in described age. ⑧ More studies were required in “Heat damaged Skin hair”, “Cold won Heat” in METAL category and “Dryness won Cold” in WATER category.

要旨

≪素問≫[1] 陰陽応象大論第五には，五行論に基づいた詳細な記載が認められる。しかし，詳細なるが故に衍文や細かな文字の誤り等が認められる。これらは，特に江戸医学館の考証学派によって，かなり詳細に校勘されているが，今回さらなる検討により，若干の知見が得られたので，それを加え，陰陽応象大論第五における五行配当についてまとめた。①木行に23字の衍文が指摘されている。②火行の「心生血」と「在體爲脉」，水行の「腎生骨髄」と「在體爲骨」は他行の組み合わせとは異なる。水行の「腎生骨髄」に関しては考証学派の校勘が行われていない。≪素問≫の他の部分との比較により，「心生血」と「腎生骨髄」が比較的新しい時代の記載である可能性を指摘した。③「筋生心」「皮毛生腎」などの記載は江戸時代から理解しがたいと思われていた。④「在變動爲憂」の「憂」字は他の「憂」字とは意味が異なることがすでに指摘されている。⑤五行の相克関係の記載はあるが相生関係の記載はない。⑥木行の「悲勝怒」に関しては注釈によって意見が対立している。⑦火行の「熱（苦）傷氣」，水行の「寒（鹹）傷血」は従来誤記とされてきたが，古い陰陽論の記載の遺残である可能性を指摘した。⑧金行の「熱傷皮毛」「寒勝熱」，水行の「燥勝寒」に関しては，さらなる検討が必要である。

キーワード：黄帝内経素問，陰陽応象大論，五行，気血，陰陽

Key Words：Suwen, Yinyangyingxiangdalun, Wuxing, Qi and Blood, Yinyang

緒言

≪素問≫においては，陰陽に関する総論的な記載が生気通天論第三，金匱真言論第四，陰陽応象大論第五，陰陽離合論第六，陰陽別論第七の五篇に述べられている。そのなかで，陰陽応象大論第五には，五行論に基づいた詳細な記載が認められる。しかし，詳細なるが故に衍文や細かな文字の誤り等が指摘されている。特に江戸医学館の考証学派によって，これらはかなり詳細に校勘がされているが，今回さらなる詳細な検討により，若干の知見が得られたので，それを加え，陰陽応象大論第五における五行配当についてまとめたので報告する。

なお，底本は以下のものを用いた。

≪素問≫　『素問』明・顧従徳本　日本経絡学会影印本（1992 年）

1．陰陽応象大論第五にある五行論の記載

陰陽応象大論篇は，その名のごとく陰陽に関する記載が中心である。しかし，後半で，黄帝は岐伯に次のように問う。「余聞く，上古の聖人，人形（じんけい）を論理し，藏府を列別（れつべつ）し，經脉を端絡（たんらく）し，六合（りくごう）を會通するに，各（おのおの）其の經に從う。氣穴の發（ひら）く所，各處名あり。谿谷骨に屬し，皆起こる所あり。分部逆從，各條理あり。四時陰陽，盡く經紀あり。外内之應（おう），皆表裏あり。其れ信に然（しかる）か」（「黄帝が尋ねた。私は次のように聞いている。上古の聖人は，身体を秩序立てて整理し，藏府に関しても筋立てて区別し，経脈を正しく連絡させ，経別にある六つの対応をきちんとさせ，それぞれが本来あるべきあり方に従うようにさせた。気穴の發（ひら）く所には，それぞれ名前や場所があり，肉が集まる所は骨に付着し，皆それぞれ始まる所がある。皮膚の三陰三陽区分および病邪の侵入がその区分通りか否かについては，それぞれ規則性がある。時節や陰陽の推移にもやはり大きな法則がある。人体の内部環境と外部環境のそれぞれの対応は，全て表と裏のように対応している，と。

本当にそうであろうか」）と。

　これは，人体は一つの小宇宙としての完成体であり，また人体（小宇宙）と自然環境（大宇宙）はそれぞれ対応している，という二つの概念を表している。これに対して，岐伯は次のように答える。(①～⑤は筆者加筆)

岐伯對曰，
①東方生風，風生木，木生酸，酸生肝，肝生筋，筋生心，肝主目。
其在天爲玄，在人爲道，在地爲化。
化生五味，道生智，玄生神。
神在天爲風，在地爲木，在體爲筋，在藏爲肝，在色爲蒼，在音爲角，在聲爲呼，在變動爲握，在竅爲目，在味爲酸，在志爲怒。

怒傷肝。悲勝怒。
風傷筋。燥勝風。
酸傷筋。辛勝酸。

②南方生熱，熱生火，火生苦，苦生心，心生血，血生脾，心主舌。
其在天爲熱，在地爲火，在體爲脉，在藏爲心，在色爲赤，在音爲徵，在聲爲笑，在變動爲憂，在竅爲舌，在味爲苦，在志爲喜。

喜傷心。恐勝喜。
熱傷氣。寒勝熱。
苦傷氣。鹹勝苦。

③中央生濕，濕生土，土生甘，甘生脾，脾生肉，肉生肺，脾主口。
其在天爲濕，在地爲土，在體爲肉，在藏爲脾，在色爲黄，在音爲宮，在聲爲歌，在變動爲噦，在竅爲口，在味爲甘，在志爲思。

思傷脾。怒勝思。
濕傷肉。風勝濕。
甘傷肉。酸勝甘。

④西方生燥，燥生金，金生辛，辛生肺，肺生皮毛，皮毛生腎，肺主鼻。
其在天爲燥，在地爲金，在體爲皮毛，在藏爲肺，在色爲白，在音爲商，在聲爲哭，在變動爲欬，在竅爲鼻，在味爲辛，在志爲憂。

憂傷肺。喜勝憂。
熱傷皮毛。寒勝熱。
辛傷皮毛。苦勝辛。

⑤北方生寒，寒生水，水生鹹，鹹生腎，腎生骨髓，髓生肝，腎主耳，
其在天爲寒，在地爲水，在體爲骨，在藏爲腎，在色爲黒，在音爲羽，在聲爲呻，

在變動爲慄，在竅爲耳，在味爲鹹，在志爲恐。

恐傷腎。思勝恐。
寒傷血。燥勝寒。
鹹傷血。甘勝鹹。

本論では，この岐伯の説に関し，江戸医学館を中心とした注釈，≪素問≫の他の場所の記載などを中心に，整理し，若干の知見を加えたい。

2．陰陽応象大論第五の五行論の成り立ちと「爲」字について

この岐伯の説では，方位（東南中央西北）を主題として，それが風熱湿燥寒の天の五気を生み，天の五気が木火土金水の五行を生み，それが酸苦甘辛鹹の五味を生むとされている。さらにそれらが次々と人体の各所を生むとされる。そして途中から若干記載方法が変化し，其在天爲熱といった具合に対応関係を述べてゆく。

この岐伯の説を解釈するにあたり，**表 1** のようにこれを記載しなおす。すると明らかなように，①東方における「玄，在人爲道，在地爲化。化生五味，道生智，玄生神。神在天爲」の 23 字は②南方～⑤北方の各段と対応がとれていない。これは多紀元簡[9]がすでに衍文であると指摘し，森立之[8]が運気七篇の一つ天

表 1　陰陽応象大論第五の五行配当

i)	東方生風、	南方生熱、	中央生濕、	西方生燥、	北方生寒、
ii)	風生木、	熱生火、	濕生土、	燥生金、	寒生水、
iii)	木生酸、	火生苦、	土生甘、	金生辛、	水生鹹、
iv)	酸生肝、	苦生心、	甘生脾、	辛生肺、	鹹生腎、
v)	肝生筋、	心生**血**、	脾生肉、	肺生皮毛、	腎生**骨髓**、
vi)	筋生心、	血生脾、	肉生肺、	皮毛生腎、	髓生肝、
vii)	肝主目。	心主舌。	脾主口。	肺主鼻。	腎主耳。
viii)	其在天爲	其在天爲	其在天爲	其在天爲	其在天爲
ix)	玄、				
x)	在人爲道、				
xi)	在地爲化。				
xii)	化生五味。				
xiii)	道生智。				
xiv)	玄生神。				
xv)	神在天爲				
xvi)	風、	熱、	濕、	燥、	寒、
xvii)	在地爲木、	在地爲火、	在地爲土、	在地爲金、	在地爲水、
xviii)	在體爲筋、	在體爲**脉**、	在體爲肉、	在體爲皮毛、	在體爲**骨**、
xix)	在藏爲肝、	在藏爲心、	在藏爲脾、	在藏爲肺、	在藏爲腎、
xx)	在色爲蒼、	在色爲赤、	在色爲黄、	在色爲白、	在色爲黒、
xxi)	在音爲角、	在音爲徵、	在音爲宮、	在音爲商、	在音爲羽、
xxii)	在聲爲呼、	在聲爲笑、	在聲爲歌、	在聲爲哭、	在聲爲呻、
xxiii)	在變動爲握、	在變動爲憂、	在變動爲噦、	在變動爲欬、	在變動爲慄、
xxiv)	在竅爲目、	在竅爲舌、	在竅爲口、	在竅爲鼻、	在竅爲耳、
xxv)	在味爲酸、	在味爲苦、	在味爲甘、	在味爲辛、	在味爲鹹、
xxvi)	在志爲怒。	在志爲喜。	在志爲思。	在志爲憂。	在志爲恐。
xxvii)	怒傷肝。	喜傷心。	思傷脾。	憂傷肺。	恐傷腎。
xxviii)	**悲**勝怒。	恐勝喜。	怒勝思。	喜勝憂。	思勝恐。
xxix)	風傷筋。	熱傷**氣**。	濕傷肉。	**熱**傷皮毛。	寒傷**血**。
xxx)	燥勝風。	寒勝熱。	風勝濕。	**寒**勝**熱**。	**燥**勝寒。
xxxi)	酸傷筋。	苦傷**氣**。	甘傷肉。	辛傷皮毛。	鹹傷**血**。
xxxii)	辛勝酸。	鹹勝苦。	酸勝甘。	苦勝辛。	甘勝鹹。

元紀大論と五運行大論に全く同文があり，ここから誤って転記されたものとして「咲(わら)うべし」としている。ただし，現伝≪素問≫が歴代の編纂の結果であることを考えると，同23字を編入しようとした人物が，何らかの理由で南方以降に編入できなかった，もしくは編入し忘れたという可能性もある。

細かく校勘する前に，「爲」字について考察したい。本節には「爲」字が「在地爲木」のように多数出現する。これはどう読み下すべきであろうか。「爲」には様々な読み方が考えられるが，ここでは代表的な以下の３通りを考えてみる。

Ⅰ．「地にありては木となす」
Ⅱ．「地にありては木となる」
Ⅲ．「地にありては木たり」

Ⅰは，現代の我々の考え方に近い読み下しである。いわゆる五行配当を示すと考えればこの読みになる。「なす」とは，「～と考える，みなす，分類する」という意味である。しかし≪素問≫を著した時代にそのような考え方があったかは疑問の余地が残る。

Ⅱは，当時一般的であったと思われる気一元論の考え方を表す。「なる」とは，「ある状態から違う状態に移り変わる」という意味である。ありとあらゆるものは氣からできていて，その気が変化することによって森羅万象のものがあらわれる，といった気の変化から見るとこのように読み下すべきである。ただし，そのように読むと，「爲」字より前に頻出している「生」字との区別がしづらい。基本的には文字を変更しているのであるから意味も異なる可能性の方が高く，すると本説はとりづらい。

Ⅲは，主題（東方の気）が，別の概念で説明すると，地という分野では木である，との意味となる。Ⅲは「別の概念」は気の変化の結果ともとれるが，Ⅱほどそれを意識しておらず，「実際そうだ」「関連づけられる」といった程度の意味となる。

我々が受け入れやすいのはⅠであるが，古代人もそうであるかは不明であり，五行配当の結果木である，という意味でⅢを選ぶのは無難であり，今回はⅢを選ぶこととする。

3．五行各行の対応の矛盾点

ここからは**表１**の記載に従い，五行それぞれの対応を見てゆく。i）～iv）までは我々が親しんでいる五行配当と矛盾はなく，前後・上下とも矛盾しないが，v）とxviii）行目に注目すると，木・土・金の各行が筋・肉・皮毛で一致しているのに対し，火行は「心生血」と「在體爲脉」，水行は「腎生骨髄」と「在體爲骨」であり一致しない。これに対し森立之[8]は，「前云『血』後云『脈』。殊文而物一。故新校正引≪太素≫亦可證。≪五運行論≫亦前云『血』後云『脈』。與此同文。」と述べる。つまり血と脈は同じ物であるとする説である。なお，≪素問≫の注釈[1]に，「新校正云按太素血作脈」とあるが，仁和寺本≪黄帝内経太素≫[2]には欠落している。また，五運行大論には「心生血」「在體爲脉」と記載されている。

上文で水行は「腎生骨髄」と述べたが，「骨髄」が水行に直接対応している訳ではない。正しくは五方・天の五気・五行・五味・五臓・骨髄という対応により間接的に五行と対応する。いま，「骨髄」に注目したい。現伝≪素問≫には，「骨髄」の語はここを含め20カ所に見られるが，間接対応を含めた水行との対応は，

この他には下記の６篇７カ所がある。

◆平人氣象論十八

春胃微弦曰平，…肝藏筋膜之氣也。
夏胃微鈎曰平，…心藏血脈之氣也。
長夏胃微而大弱曰平，…脾藏肌肉之氣也。
秋胃微毛曰平，…以行榮衞陰陽也。
冬胃微石曰平，…腎藏骨髓之氣也。

◆痿論篇第四十四

黄帝問曰，五藏使人痿，何也。
岐伯對曰，
肺主身之皮毛。
心主身之血脉。
肝主身之筋膜。
脾主身之肌肉。
腎主身之骨髓。

◆四時刺逆從論篇第六十四

是故，
春氣在經脉。
夏氣在孫絡。
長夏氣在肌肉。
秋氣在皮膚。
冬氣在骨髓中。

帝曰，余願聞其故。
岐伯曰，
春者，天氣始開，地氣始泄，凍解冰釋，水行經通，故人氣在脉。
夏者，經滿氣溢，入孫絡受血，皮膚充實。
長夏者，經絡皆盛，内溢肌中。
秋者，天氣始收，腠理閉塞，皮膚引急。
冬者，蓋藏，血氣在中，内著骨髓，通於五藏。

◆五運行大論篇第六十七

帝曰，寒暑燥濕風火，在人合之奈何，其於萬物，何以生化。
岐伯曰，
東方生風，風生木，木生酸，酸生肝，肝生筋，筋生心，
（中略）
南方生熱，熱生火，火生苦，苦生心，心生血，血生脾，
（中略）
中央生濕，濕生土，土生甘，甘生脾，脾生肉，肉生肺，
（中略）

西方生燥，燥生金，金生辛，辛生肺，肺生皮毛，皮毛生腎，
（中略）
北方生寒，寒生水，水生鹹，鹹生腎，腎生骨髓，髓生肝，

◆氣交變大論篇第六十九

帝曰善，願聞其時也。
岐伯曰，悉哉問也，

木不及，春有鳴條律暢之化，則秋有霧露清涼之政，春有慘凄殘賊之勝，則夏有炎暑燔爍之復，其眚東，其藏肝，其病内舍胠脇，外在關節。

火不及，夏有炳明光顯之化，則冬有嚴肅霜寒之政，夏有慘凄凝冽之勝，則不時有埃昏大雨之復，其眚南，其藏心，其病内舍膺脇，外在經絡。

土不及，四維有埃雲潤澤之化，則春有鳴條鼓拆之政，四維發振拉飄騰之變，則秋有肅殺霖霪之復，其眚四維，其藏脾，其病内舍心腹，外在肌肉四支。

金不及，夏有光顯鬱蒸之令，則冬有嚴凝整肅之應，夏有炎爍燔燎之變，則秋有冰雹霜雪之復，其眚西，其藏肺，其病内舍膺脇肩背，外在皮毛。

水不及，四維有湍潤埃雲之化，則不時有和風生發之應，四維發埃昏驟注之變，則不時有飄蕩振拉之復，其眚北，其藏腎，其病内舍腰脊骨髓，外在谿谷踹膝。

◆五常政大論篇第七十

帝曰，三氣之紀，願聞其候。
岐伯曰，悉乎哉問也，敷和之紀，

木德周行，陽舒陰布，五化宣平，其氣端，其性隨，其用曲直，其化生榮，其類草木，其政發散，其候温和，其令風，其藏肝，肝其畏清，其主目，其穀麻，其果李，其實核，其應春，其蟲毛，其畜犬，其色蒼，其養筋，其病裏急支滿，其味酸，其音角，其物中堅，其數八。

升明之紀，正陽而治，德施周普，五化均衡，其氣高，其性速，其用燔灼，其化蕃茂，其類火，其政明曜，其候炎暑，其令熱，其藏心，心其畏寒，其主舌，其穀麥，其果杏，其實絡，其應夏，其蟲羽，其畜馬，其色赤，其養血，其病瞤瘛，其味苦，其音徵，其物脉，其數七。

備化之紀，氣協天休，德流四政，五化齊脩，其氣平，其性順，其用高下，其化豐滿，其類土，其政安靜，其候溽蒸，其令濕，其藏脾，脾其畏風，其主口，其穀稷，其果棗，其實肉，其應長夏，其蟲倮，其畜牛，其色黄，其養肉，其病否，其味甘，其音宮，其物膚，其數五。

審平之紀，收而不爭，殺而無犯，五化宣明，其氣潔，其性剛，其用散落，其化堅

斂，其類金，其政勁肅，其候清切，其令燥，其藏肺，肺其畏熱，其主鼻，其穀稻，其果桃，其實殼，其應秋，其蟲介，其畜雞，其色白，其養皮毛，其病欬，其味辛，其音商，其物外堅，其數九。

靜順之紀，藏而勿害，治而善下，五化咸整，其氣明，其性下，其用沃衍，其化凝堅，其類水，其政流演，其候凝肅，其令寒，其藏腎，腎其畏濕，其主二陰，其穀豆，其果栗，其實濡，其應冬，其蟲鱗，其畜彘，其色黑，其養骨髓，其病厥，其味鹹，其音羽，其物濡，其數六。
故生而勿殺，長而勿罰，化而勿制，收而勿害，藏而勿抑，是謂平氣。

このなかで氣交變大論篇第六十九は，部位を表しており他の篇の記載とは意味合いが異なるので，ここでの考察からは除外すると，骨髓と対応するのは下記のように記載されていることがわかる。

◆平人氣象論十八
筋膜
血脈
肌肉
榮衞陰陽
骨髓

◆痿論篇第四十四
皮毛
血脉
筋膜
肌肉
骨髓

◆四時刺逆從論篇第六十四
（前）
經脉
孫絡
肌肉
皮膚
骨髓

（後）
脉
血
肌
腠理
骨髓

◆五運行大論篇第六十七
筋
血
肉
皮毛
骨髄

◆五常政大論篇第七十
筋
血
肉
皮毛
骨髄

以上より≪素問≫において「骨髄」が人体における五行配当の一つとして記載されているのは計６カ所であることがわかる。そのうち陰陽応象大論と全く同一の記載がされているのは五運行大論と五常政大論のみであり，両者とも運気七篇に含まれる。

すなわち，運気七篇の五行配当は陰陽応象大論の五行配当との関連性が明らかである。二つの五行配当の関連性をどのように捉えるかが次に問題となる。著者は，中国古典においては，古い記載に新しい知見を付け加えるときは，しばしば新しい物ほど前に置かれる傾向があると考えており，ここもその一例かもしれない。さらにいえば，「生」で繋がれた i）～ vii）行が，「爲」で繋がれた viii）～ xxvi）行と時代が異なり新しいことを示しているかもしれない。なお，林は脈，皮，筋，肉，骨などの「五主」「五体」について，≪素問≫≪霊枢≫を中心に≪胎産書≫≪千金要方≫≪陰陽脈死候≫≪脈書≫≪管子≫≪周礼≫≪淮南子≫他を引用して詳細に論考を加えている[3)4)]。参考にされたい。

vi）行は，前後上下に矛盾するところはないが，内容的には「筋生心」「皮毛生腎」など，低位のものが高位のものを生み出すとされており，理解しがたい。これに対し，森立之[8)]はそれぞれ下記のような意味であると案じている。

・「筋生心」：筋が心の血脈を生む
・「血生脾」：血が肉を生じ養う
・「肉生肺」：肉が皮毛を生む
・「皮毛生腎」：皮毛が骨を養う
・「髄生肝」：髄が筋を生む

五臓そのものである心・脾・肺・腎・肝を筋や血が生むというのは現代の我々としては受け入れがたく，江戸時代でもそうであったと思われるが，実際はどうであるかは今のところ不明である。

火行 xxiii）行で，「憂」字が出現している。この字は xxvi）～ xxviii）で３カ所（本来であれば４カ所）出現しているが，森約之は≪素問攷注≫[8)]で詳細にこの字について校勘し，この字は今字の「嚘」であり，「うれう」ではなく「気逆」であ

ることを喝破している。

また木行xxiii)行の「握」字は,王冰が「引きつけられ付き従った状態ないし結果」と註しているが，森約之が≪広韻≫他を引き，「手脚が曲がった状態に制約され，または曲がった状態に引きとどめられる症であり，すなわち今の肝症である」と案じている。これは従うべきである。

viii）行～ xxvi）行までは，五行が天，地，体，蔵，色，音などにあっては何であるか，という記載であるが，xxvii）行以下は，五行の相克に関して述べた部分である。2 行ずつ，すなわち xxvii）行と xxviii）行，xxix）行と xxx）行，xxxi）行と xxxii）行が対となっている。ここで留意しなければならないのは，五行の相生関係に関する記載はこの岐伯の説には全く見られないということである。「生」という字は i）～ vi）行に見られるが，全て同じ行のなかの記載であって，木行が火行を生み出すといった記載は見られない。これは，五行に見られる相互関係が，相克関係が先に成立し，相生関係が後から出現したことを示しているかもしれない。

まずxxvi)行で五志が提示される。ここでは木・火・土・金・水の順に怒・喜・思・憂・恐が提示されている。xxvii）行では，五志がその行の蔵を傷つけることを述べるが，これは前行とは矛盾しない。しかし，五志の相克を述べた xxviii）行において，木行で「悲勝怒」となっているところが矛盾する。他行と比較すると，ここは「憂勝怒」でなければならない。これは単純な間違いと思われ，多紀元簡も「此悲當作憂」としている。多紀元簡[9]は，新校正[1]に「怒り，憂いがあってそれが解消しない場合は『意』（脾土）を傷る。悲哀を心や体のなかで変動させると『魂』（肝木）を傷る。だから『憂』といわないのだ」との説があるのを一蹴している。一方，森約之[8]は「五運行大論でも『悲』に作っており，憂と悲は同じ原理に帰着する」と案じている。

xxix）～ xxxi）行は，もっとも記載の乱れが多いところである。

xxix）行，xxxi）行では，火・水行と他行で齟齬が見られる。木・土・金行では，傷られるものは v）行で生み出されるものもしくは xviii）行で体にあって配当されるものであるが，火行では気，水行では血となっている。これは五運行大論でも同じである。これを森立之[8]はたんに「『熱（苦）傷血』というべき所を『熱（苦）傷氣』と記載している」と案じている。

金行の xxix）行，xxx）行は，「熱傷皮毛。寒勝熱」となっている。五運行大論も同じである。森立之[8]はこれを「新校正[1]にならい，太素に従って『燥傷皮毛。熱勝燥』となおすべきだ」としている。また水行の xxx）行も「燥勝寒」となっており，五運行大論も同じであるが，これも「新校正引ける太素に従って『湿勝寒』とすべきだ」としているが,現伝≪太素≫には欠損している部分である。このように修正すべきだと指摘している森立之であるが，王冰が伝えた本は現伝≪素問≫と同じであったろうとしている。

この xxix）～ xxxi）の 3 行について考察する。これらはたんに記載の誤りで

あろうか。ここでのポイントは，本来なら存在しないはずの気・血の文字が火行と水行に認められることにあるのではないかと筆者は考える。火行・水行は，火と水であり，すなわち陰陽に通じる。同じ陰陽応象大論第五に，「水爲陰。火爲陽」とある。また同じ陰陽応象大論第五に，下記のように記載されている。

「陰勝則陽病，陽勝則陰病。陽勝則熱，陰勝則寒。重寒則熱，重熱則寒。寒傷形，**熱傷氣**。氣傷痛，形傷腫。故先痛而後腫者，氣傷形也。先腫而後痛者，形傷氣也」

本論では陰陽論にまでは踏み込まないが，ここでは陰陽の偏勝に関しての記載があり，このなかに xxix）行に見られる「熱傷氣」句が見られることは重要であると考える。ここの陰陽論においては気は陽，形は陰であり，「寒傷形，熱傷氣」と記載される。これと，生気通天論などにも一般的に認められる気は陽，血は陰という考え方を組み合わせると，xxix）行の火行と水行は誤記であるどころか陰陽論の本質を述べているといえよう。xxxi）行もまたその延長上にあるといえる。これらは古い陰陽論の記載の遺残である可能性がある。

こうして考察しても，金行の xxix），xxx）行および水行の xxx）行は説明がつかない。今後のさらなる研究成果を待ちたい。

結語

古代医学における五行配当に関しては，丸山昌朗[6]，李漢三[5]，丸山利秋[7]らが詳説している。古代医学における五行の意義等に関してはそれらを参考にされたい。今回我々は，考証学の手法を使うことにより，原典そのものの詳細な検討を行った。それによって，若干の知見の追加ができたと思われる。

文献

1）著者不詳：≪重廣補注黄帝内経素問≫明・顧従徳本，日本経絡学会影印本，1992
2）著者不詳：≪黄帝内経太素≫，仁和寺所蔵，オリエント出版社，1981
3）林克：≪素問≫≪霊枢≫の五主について．大東文化大学紀要・人文科学 35：145-164,1997
4）林克：五體考．大東文化大学漢学会　36：98-125，1997
5）李漢三：先秦両漢之陰陽五行学説，維新書局，台湾，1968
6）丸山昌朗：「素問の成立を論ずる」≪鍼灸医学と古典の研究≫所収，創元社，1962
7）丸山利秋：黄帝内経と中国古代医学，東京美術，東京，1988
8）森立之・森約之：≪素問攷注≫自筆原稿　国立国会図書館蔵，江戸，1864 脱稿
9）多紀元簡：≪素問識≫　早稲田大学図書館蔵，万笈堂，本石町，1837